續千載和歌集　中

九曜文庫

續千載和歌集巻第七

雜躰

秘密乃おしへ乃心をよませ給けるなかうた

法皇御製

くりかへし　こゝろは空に　てらせとも　わきとてつく
うき雲と　風のたよりに　はそはさて　おとろかしめと
そくさより　そこきはみを　ゆくふらん　これさまさりん
あめとそそ　三世の佛は　そまけり　とれとく法は
はまくふ　七の宗まで　まうけとと　こゝろひとつを
あるとして　ゆくとあまりて　たつのいろ　ちのおまとも
これをみなる　ちのそふの　うせれとも　ゆきさこそあまり
わかのみち　八年の秋を　むかへても　やまとことのは
ひとりのく　青とならぬ　月なれす　鶴のかやみ
ながりまよ　八つりとせ　よれてこそ　ゆくとれ法は
見とめんと　ときけるには　すゑつかふ　三のくふく
あへてさそ　わかやまと　ときゆまる　わきまね照を
大ひろ光ん　本の国とそ　まれるしら　流れりをさねる
ことりの　くれかれく　やまとりれ　このもとなく
ひさしくぞ　忠をはりん　くるあまて　代々をうつて
あらんせねは　えふの月　こゝろにすく　さとりぬへきを

うごかし 世をおさむるしるしとて ことわざにしるし
世のうきみよ きこゆるを みちきりよ しものみちひとを
てふまうせ 婦の風ふなし ことにおいては 民の心をも
やさしく 万代に之に わかれて 久種の國そ
ゆるらなるべき

久しうし

代々のえらびの志るしをえらびあつまれる照る日月の
ふ

郭公乃なかうし

よみ人しらず

あふちらく いにしへをこころえて さとおもへる

かくこそす いまくさすれなくも恋をこそ偏かと
わかみは よそにそたち ゆきかへりいはぬ 告をしみさきに
こ重ねとも ひとしくおもふも いまここさるらす

友則

ゆちなきはさらりいさ髪の山河るなとつきるね

読人しらず

これりるの神なひ山よ いかにはしけれひろ
ところ来れ やつさくふ 何まつら たゆらしれ
わきはしも やまはよん 何となの也 ゆきこゆこ
山ふかく かへしはら 志ろの里は 雲まぞみえ

赤人

秋乃よそ河しをきしおきくとふあつかされて
ゆふさりにきくはくてみつとに神あるらる
むしこゑは
久しうき
あすかはの河のとはすたかさり越ひまさく水さ高よかなるに
よみ人しら次
やまとうたの和歌のみちには昔されて花はさみなる
妹はまてとみちあまひおひまかせるいつみかれ
きみをにうちは海よみせきはうちはしきし
ありかよひ流れまつらんよる川せまてに

久安百首のうたてまつりけるなかうた
花園左大臣家小大進
君か代はゆたけき御代とむかしさてとゝのりきを
みつきのひさかたのさゝしふにこれは乃山よも
なそめそろさゝなまつれやちよまでそらのみちまで
月とりなははしき風そのあちはゝこさみうるを
つきやしいのちかれさゝに嗟は孫ふねをも
ころこさにのちいのちはなからえのまはことを
おほそすまとれなたえをおほぬは万代とつく
たむらめれよろひゆつとむまさらし河まのさ河乃

はしなかりしとも八雲のふるきあとはのこれはたに
ひとりのみてかく思ひにこころえねはつかうまつるも
おほかれとこころありしうちしのひとかたにこそ
またちまにうたのせのうしことさかん我朝に吉に
いまひはく代をふる毛ていつくの竹のみなもと
またみちの世を見ることさかちふうしろてみちふとしの
それならへふたとをいておいのすゑとあはれなる
んちつくらせめ

旋頭歌

題しらす　よみ人しらす

白雲のゆふりしつ名にはたちわたれしも春のまゝ
あふひく聲へりうくひすなくし
その河きのやゆつきうしてふわたらへしたつま
あふのゆしてまつ月のよ人の人をも

人麿

その人乃かつきうしてよはうからうそれともこれ
君かさ見よみはしらの年

故宗澄信物院出家してはけれはけりん

としふりし花ゆへことをおもひてむし
いはれしとおほせられてせめてのたまひけれは
前に一句をそふらふしやつかまつりて侍ける

皇太后宮大夫俊成

見んとりしとおもひし人も花ゆへそむく世を
みるらしさはゆめかうつゝ

返し　　隆信朝臣

おもそなき花もうつくしも雅よくとつまし
君か見ん世ありそむかはりせは

折句哥

伏見院かんこの家と申侍けるときまろ
らうすなかりてひさしくまいりけるを
あるよ御製をたまはせりけるはそのふ
こひしさはまつましもはそとふしとを句の
上下におかれて

入道前太政大臣

これもまつひとゝつのこまちをかまてをはまろひさしを覚て
亀山院御時ひやうふをつとこをお
句くりかうかりにおかれてよあしとれかせ
しとおつまくれしつかうまつりける

前大納言為氏

こゝろにはひまなき世をもみしはやのかりねのなみたなれ
の庵
ゆふくれのこゝろをさそふへしとのふるさとのみ
侘けり

ゆかれせしちくさのはなをてみなもとゆきにまかせてしかな
澄信親王まつてこむとやまの月とてうつ
てりやあかんとていひし日数ゆかしなよ
やよふしとくさかりゆりふみさてしみ
てつらしけり　後法性寺入道前関白太政大臣
いつかまたひとりあかすらんのふてひとつしなかひとりはて

物名

きのえ　曽祢好忠
ゆき菜そてわかものとしもまつさきにさく花のはなにあはれは

かのえ
萩の花えはほとゝきすのなくねをまたもきかまし
庚申乃夜ねられぬ人よ　伊勢大輔

なふしともまつ月かれと世中はえのほとさえもかくれ
むかしから　津守国助
うちひとはものみるへとりとめりくらんさ風もなし

もりのかれ

隆信朝臣

よとせやいそちあまりふおもとものはかなの我身
西治百とせの帝てきつりける時くみより

皇太后宮大夫俊成

なにはのあしの葉やかきそたくみとりにすむ沙の鶴は
まつのこさ

入道前太政大臣

ゆくすゑもかはらぬひかり月にまつ君を祝てあまつけ
やまとの

左大臣

まつなつねやとめてかけまてれとやよろつよさ夜の月
ゆくへ ひさけ

前中納言定家

神山よりて世にあらん都葉のひさしさえぬをかけそけ
うつしこそつま

前大納言為氏

けふやまたもろこしもろこすゑをちらのなれやさかへ京
おもさきそしき

入道前太政大臣

三重まよふのまてさなかの花とこさかさくる雲の色け
うしろれ

太政大臣

いつよいふをさしこしるかれものへとくみちかるらん
かれとそぬこと

津守国助

あふことのむ命をかりみたかみをまてらかさ

とくさむくの葉

俊頼朝臣

われもなくとくさむく野はなみにかり出れ忍ぶくもかりまで
行くもやま

山本入道前太政大臣

かすみてもの葉末風も行くはやまずそこも重なり

誹諧哥

む月七日ばかりしに梅をそへて人のもとへ

こゝろある月のはしめをなけきてし

祐子内親王家紀伊

春雨にさくにつもりてもかはらぬまゝ色となりける人の忘哥
さらにしらず

大貳三位

枝ごとにふりつもりけるむかしもさらにしてもおる人ぞ梅を
柳室門前といふらんを

従二位頼政

拾玉集より

春柳かぜにれことみえんとやいろさそふとまちたらん
百首哥よみてたてまつりし時

入道前太政大臣

空かきくもりはれぬや春の夜の月も霞の袖にさえて
こさろしきの俊恵法師につかはしける

もはつかしけり

大僧正行意

君かためあめ風をそいとふらんのとかにもまた花のちるらん

題しらす　信實朝臣

まねくとそさのみも人はおもふらんはかなき花やちるらん

大貳三位

みをれなからそのことそとは河かつらやかはくひま白露とおもふこゝろそ

よみ人しらす

わかとくてあらぬ思をうつせみの人のつらさとたえぬおもひを

弁乳母

山のはを出るのにもさやかにていつかたになる月のかけかな

嘉元百首歌奉りし時

前大納言為世

あかくはおもひそめてはかへるともたれそみせそ枕にはならけり

題しらす　正三位知家

ちりのめくさかれ秋わかれやむもいそつらかれと ものをはまちて行かは山のかみちにちりけり

康資王母

さほ山のおしそやそねせけりみちれなかき月にとこさ

都中きく人のたえにやへさりすなつちく

ぬりて身のつけつふるひくなしや
やてあはさりまとなれし

俊頼朝臣

ちる木はなれてふせやとふやちるまでにもくもえん

題しらす　正二位知家

契りこしひとのこゝろのみまつらとたのむかひなき

逢遮車恋といふことを

従二位雅政

のちさそやかてわか身そかくさへめくりきてたえていきてもむかふ車か

題しらす　衣笠内大臣

ますらをの世にあはさらさたれてめくりあはぬ行
うきみのこ我人のなさけはせぬなをれいよみ給
けり

和泉式部

いつはりのうきあきてたのましむるのよの世の人の心は

題不知　前大納言為家

うち人の聲にきえよあまつみのけもとふ世をもはなる

光俊朝臣

世とともにかくなみえしもかねは我もいまふかくしのふの

道円法師日吉社の歌合に述懐を

よみくまけよそりとさていひけるに

しけり

俊恵法師

君かよにしつまれいらとかへしらとをかこちれ
なにゝかわやしらきれ

續古今和歌集巻第八

羇旅哥

みちのくにゝまかりける人に餞し侍るに

権中納言敦忠

ゆきかへりのちと思へともわかれちはいまはかなしくおもはれ

おなしくにへまかりける人のもとにつかはしける

小野小町

みちのくはよをうきしまもありといふをせきこゆるきのいそかさらなん

ひとのくにゝゆく人に

壬生忠見

おく迄といふね波もたむけはとてめくつゝりのやそさけ
りのへまかりける人にぬさつかはすとて
貫之
みちをともたむけそ植る人をはるかなやまの神やうけなん
とのへゆかりける人へのりとに
恵慶法師
こなたなる人の手すまはおほろとも秋の月みは思ひ出なん
とをき所へまかりける人にこちら天の
ぬりしたてきつきてつかはしける
藤原清正
君かためいのりてあそふる衣まれの袖やたむけをぬらん
ぬ中へまかりける人のもとにあふきさふにつけ
てつかはさし第菊
中務
君かゆく雲ちをとほみおもひつゝいのちん風にへ送り
天暦九年宇佐の使の餞よそへのなこ
ともらしこよみけるに
藤原高光
露わけしこのあはれ月をみわかれしゝ君か子とせを祈りかけ
源季廣下野守になりてくたり侍けり

まつりけり　刑部卿頼輔

ゆく人の命をたのむ別路は君をも身をもおしむなりけり

返し　源季広

別路そいまはなくさむ君かくくまもりしきこゆは無為なる

別乃心を　因幡法師

なくさめにかへらんことを契れとも命はしらぬならひなりけれ

蓮生法師出家してのちもしらしろうたひらしひて結ひける女をおもやりてへつかはすとてよみてつかはしける　信生法師

かなしゆく空もなきさ別路はゆくもとまるも心なりしを

返し　蓮生法師

いまはよにふるさとゝてもなけれはこそ人のあとそさそふ家出つ

因幡守になりてくたりける人にゆきを流つかはすとて　前大納言公任

あつさゆきさえてめてもみえし我か家はきえしとおもはれ

まひゆく人はよういかんをつかはすとてよみ侍ける　馬内侍

見えぬれなとそふるかたみのみけしきにもきりてもまくせ衣とも思しらすや　土御門院御製

あさ霧にこのしまかくれゆく舟のしらぬ別を袖ぬらしけり

山階入道左大臣

ゆく海のなこりに遠さかる舟のうちより京にしけゝ夜半

前関白左大臣 遊泉

うらくはも急のとまりはしらねともあまかいそくとつゝく舟

平宗宣朝臣すゝめ侍ける住吉社三十六
首哥よ海路

前大納言為世

けさはみなとはほそくおひ風をふくにひとくふねつとゝ舟

題しらす

平氏村

こゝろなきちゝてそらに舟ゆくともみしはとさらつく

てる月をともしにそしまかけはふかき舟にせんと浦つたひせし

なみかせはこゝさ出る舟のゆくへそしられぬ八重の潮路も

よみ人不知

ゆふなみのやとやそこまてこの京雲にかすむちかたてもしられ侍

新院御製

百首哥たてまつりし時

権大納言定房

なみかゝる遠入日に舟とめてよはにあけ月をとふ人

旅の心を

津守國助

浪こえし袖のみなとをたちそめて月もうきねの風やとりけり

流しくるくりかけからあかし山のふもとなるよ
ひとすしをへさうふおもひつくす浦

大江忠成朝臣女

秋さ過ていくよかれぬる世を浪の枕にひとりきくらん

題しらす　藤原秀賢

ゆめまてこよひやひとり過て浪の枕にかよふ浦風

夕泊といふことを

前大納言通重

ころくとなち風寒くこえまて志らぬみなとにまつ舟人

羇泊の心をよませ給うける

後二条院御製

なこの浦にとまりとさためれは志さゝへの枕にたかきさはき白波

嘉元百首哥奉りける時羇旅

前右大臣

舟とむるとまりは浦そなれぬる人もとらさて世まてかねてひとそ浦
烏これならしを

平齊時

たひ人をとこぬ月もまちあつまちゆきてはるかにたつ浦浪

題しらす　藤原行朝

かちそあとたひかへるも旅衣あまちかりうちまゆ独ねをす

惟康親王家右衛門督

旅衣都へいそくみちなれはいとゝ袖はしほりけるかな

関路行客といふ事を

尊覚法親王

旅人のこゝろしるみちあれやゆくさゆくさなゆるせき守

百首哥たてまつりし時

前右大臣

いまよりもとはやさかぬ旅人のみちひろきよに相坂の関

前右近大将教綱にやとりのありて侍ける

かあつまへくたりけるむとしきこはつかうし

哉

前大僧正慈鎮

東路のふるみちはそのかみのいはふるとも都にすみもとめかり

思し

前右近大将教綱

都にはふるおなしふるさとれはちらとしてもとむとも

旅乃哥の中に

寂信法師

旅衣鳴ふくみちにかりそめにさてもおなふるさ

可能上人

都をはひとり出しといふにてうれしとやかりそかなれ

藤原重名朝臣

都出ていくよになりぬ草枕むすひふせ孫の露をのこして

菅原有高

くまねとも里ハ思ひしきらすへてむかしいかなる菖蒲の根を

藤原為道朝臣あつまにゆけると五月

五日あやめにそへて侍りし哥

前大僧正云綱

猿ねとも思ひはさしもあらん菖蒲枕はやめにこそひまひに侍

返し

為道朝臣

かりそめにあやめにそへて菖蒲こそひ猿ねのくちをせねこれ

影しらす

平宗直

梅しき道もあふひ猿の枕かりとりかへ鳴ませて夢そ覚める

猿宿夢といふ事を

平貞時朝臣

夢むすふ猿ねのいかにみし菖枕かりそめの袖ぬれつゝや

人にもしめてよその手世給きつ絶若枯十

首夢かり 猿宿夢

前大納言為氏

夢さへにさやはいひしなかにかりかあけのやまかは杜嵐

又系みるよみけりの小真野入江

源親長朝臣

くまねさく此の入江のあさかれにてつゝ袖はおりかへり

旅の心を　　中務卿宗尊親王

旅枕いくよ露にむすひきぬひとよかりねの契を
野中の志みつをたれ結ふとて

平斉時

たちて小野中の志みつをみくもなほたちまさるかな

題しらす　　法印円伊

わけきつる山路の露のぬれ衣かさねてそ野辺のかり庵
旅ねしつゝけつるみちのくの野辺のかゝを
たのまれける人にあはけむとて

よみ人しらす

今こんとむすふ契りもあるかなのこりてみちのしら露

題しらす　　藤原重顕

旅寝には露もなほ草枕むすふかりねのかひをかこちて

百首歌奉りし時

旅衣かさなる袖の露しけみいくよのかさねかさねてもかな

入道前太政大臣

弘安百首歌奉りし時

いそきつるみちはゆきてかへさよいさとや志せて尋ねし

題しらす　　永福門院

旅衣の日かけ袖は露にぬれても草枕の野辺への中にも

今日のわしのそこにてふしやとせ山の入あひのこゑ

猿啼より室戸へまうて侍りし小山路

よみくれくる猿の聲をききて侍けれは

法印道我

今そしるゆふこえくれてきつせ山ひゝきはつの入相の鐘

猿乃心を

慈光院入道前関白太政大臣

くれはとてとひつるさるのなくなれはよるまよふ宿やなからん

よみ人しらす

いにしへもさてあるね猿はゆふされの里とふ声に宿やとらまし

従三位宣子

露はれてやとりし衣はそれとなくさとはとへともちれ猿の聲

百首哥たてまつりし時

前関白太政大臣 押小路

ゆくはてもなきかたにさるひとりのこゑを[illegible]

題しらす

了雲法師

猿の声ことゆる山のおくにゆくはきかんとて出る月の影

紀淑文朝臣

ゆきくれてやとりの猿へも宿とはへきえつゝ山に月を出す

大江宗秀

あまつそらおほふ雲ゐによるの月のなかに猿なく声もしるらん

惟宗忠景

萩花露のやとる梢月はかさぬる旅ねの袖やかはらまし

百首哥たてまつりし時

従三位宣子

月をまつこゝろひさしき秋の夜をやとるや野辺の露のよね

月前思旅といふことをよませ給ける

土御門院御製

こよひたれけふ秋にやとりともなくもあはれ旅ねの月

旅のこゝろを

遊義門院

こよひこそ雲ゐにかよへ山ちかき影にてみし月そこと絶ぬ

源兼氏朝臣

秋すゝかのふ草袖はわきえぬそへて月を数のこゝろにそみつ

前参議雅孝なくなりて月のころ人のもとによみてつかはしける

丹波忠守朝臣

ともをまちこゝろにみえては月の数月の影にくもれ

返し

前参議雅孝

いつかと見も面影の月にそへし月の影もこゝひとそやまし

前中納言定房家にて路秋望といふ心をよみ侍りける

藤原清忠朝臣

ぬれはしと袖にかけゆく猿なきにあさけの山のまつの下露

秋のころあつまへくたりけるに佐夜中山に
て
観意法師

ひとり行さよの中山なかなかに秋風さむくぬるゝ月影

題しらす
前中納言定家

むらさめの雲あかちかたにしのへとも山のはにてこえなん
藤原基綱朝臣

暁のせきの杉かたあかちこえて秋てつるあふ坂のやまし
あつまへくたりけるみちによめる
祝部成茂

こよひこそ名にせきもりのまもるとも月とみえてはゆるさてやつくさ
暁猿を
惟宗光吉

よをこめて山ちはいてぬ有明の月よりさきにやなくらん
題しらす
中原師員朝臣

猿のなくこゑも山のせにゆめさめて枕よりみる有明の月
賀茂景久

こゝろむくやまとのかたの山ちにも枕よさむきさよの山風
洞院摂政家百首歌に猿
藻壁門院少将

みねまかるこゑひとつれいたるのふしてたつさそへるみねのさるらし

弘安百首哥たてまつりける時

前大納言為氏

月まちて猶こそこえめゆく人ハよふかきみちをしるや中山

題しらず

平花貞

あれやして宿とひかぬる行人もなを嵐吹そふさ夜の中山

嘉元百首哥たてまつりし時猿

前大納言有房

ことわりとなきよはぬふしのたくひまて数ゝの人よりいかゝかなしからん

題しらず

津守国道

まちはらふあきまの山のこのまより雲懸と人のやいふらん

大江廣房

秋来ても猶しらかしにかゝる雲それとわかるゝ嵐山

源邦長朝臣

秋風におとろくまゝに吹そめて数ならぬさへしらるゝの関

嘉元百首哥たてまつりし時猿

贈従三位為子

旅人もえそ見やらぬふかき夜の霧ふけまさる嵐に

宮中猿秋とこふとよ袖をぬらしけり

今上御製

宮風のちよ昔のみちをふみわけて雲よりなれぬ駒の跡そ恋しき

後京極摂政家冬十首哥合に関路雪

前中納言定家

ゆきかへる道の関やれ板ひさしあきもゆく月も光とめけり

大江頼重こしに侍けるにつかはしける

法眼慶融

越路にしくるゝ比のむら雲にそなたの空の雪けをそ思ふ

返し

大江頼重

都にはまたれぬ時雨よと思ひやることしハ雪ふる日そ多かれ

題しらす

法眼能因

しら雨やまけさこえゆけハ旅人の袖もさむし雪ふりて

寂恵法師

越こゆる路よりかへは旅人のかよふあとさへ野への白雪

あつまへくたりて侍けるにとしへてのほり
かへりのほりてよみ侍ける

祝部成茂

なましゐにかへりし比とおもほえて涙にかはるやまかけの袖

前大納言為氏あつまへくたりて侍
ころのほり侍けるときにつかはしける

源義行

ゆきされ旅ねの夢にみえやまんとおもひをそれぬ人かりハ

返し　　前大納言為氏

御ことはをうけつくねんとも残すねの葉にみえはたのまん
道しらす　　権中納言為相

あての葉の道よひらけ世さとめし跡を残すのみかさねふせん
　　前中納言経継

長くとも結ひもそへよ草枕かねのこゑよその嵐に
　　土御門院御製

いそのまの枕にしもあまたはふかふおとろかす松かせそ
家百首歌中に猿　　後京極摂政前太政大臣

あきふかき葉猿もありやましてや嵐のこゑも松ならすは
百首歌めされしついてに　　法皇御製

よをいけ山かけのとて人とひとよにふる暮猿は
思ひの心あまりせいけり
ゆくとらいそちとなく心のなかなく
この世をと猿ととへ

続千載和歌集巻第九

神祇歌

建長五年住吉に御幸侍て旅述懐
といふことを講せられ侍けるによませ給う
ける　　後嵯峨院御製

神代よりへぬる住吉の松をも千とせと定めしも
いま毎ときみか契を契るらん君か御代をそ住吉の松

太宰権帥為経

住の江やたえぬふるきのみゆきとはまつとてそ神も千とせのあま

前右兵衛督為教

弘安八年住吉に御幸侍て同し心を講せら
れ侍けるに　　山本入道前太政大臣

住吉の松に千とせをこゆさするあめのみかとや神の心ん

住吉神主国平太宰府に法楽歌数あまたま
つりとて松枝に結ひて侍らるとて女房に
かはりて　　常盤井入道前太政大臣

千とせともいのる心のことの葉を結ひやはくる住吉の松

住吉社を修理によりてわたして宮神祇祝と
いふことを人々によみ侍ける時

権中納言為藤

住吉の松も花さく御世にあひくとつりゆみれ忘き鶴なる

本社によきふるひて海をいのりてよめる

津守経国

何ゝ思ひはさのみ忘れそこに三重にそへてこそゆかん

津上月と　皇太后宮大夫俊成

いにしへの神代もみえや天くたりまし住吉の月

題しらす　よみ人不知

高き世の神代のことそえのうさきは思ふをとふ猶

津守国道

契ありてつかふる神のめくみは千世ともたのむかな

玉津嶋によせてよみ侍ける　前大納言為家

見るまゝにとつる玉つ嶋いまもおつもる光そまさる

源兼氏朝臣すゝめ侍ける玉津嶋社十

五首哥に　前大納言為氏

玉津嶋やちとせのまもりわか世まてかはらぬ神の恵をそしる

題しらす　前関白太政大臣家讃岐

わかの浦やむかしにかへる玉もいま光をそへて神そみるらし

津守国助

和哥の浦によせてしらぬひのかきつもる藻の玉津嶋姫

入道前太政大臣家十首哥に述懐

一すちによそ見をもいはふかき心神にまかせぬ我身なりせは

春日社によみてまつりける哥の中に

前大納言為氏

埋木の身はいくとせふりぬとも神に春のめくみをはまたせ

前関白太政大臣春日社によみて侍けるに

山階寺の別当にて代々の跡よりもすとらぬことなひてかりひつきを侍けり

大僧正實聡

三笠山老木もいまは花咲て代にいくかすな春におひなむ

花しらす

前参議雅孝

三笠山春のめくみのあまねくはかれにし木にも花やさかえん

嘉元百首哥たてまつりし時山

一条内大臣

てらせ猶と山は三笠のあさひかけかくふかき心もくらふやみちを

西行法師人々すゝめて百首哥よませ侍けるに

前中納言定家

なかくにかくしてもよしみかさ山さかふ心は神もしるらん

みな月の比春日社にこもりて法楽し侍ける哥の中に

常盤井入道前太政大臣

春日山ふもとのさと宮柱よしさくらみそ君におまかせ

神祇の心をよませ給うける

後二条院御製

今よりはおもはれとおもふすむ山ふるさとたのむところ年月

前中納言定資

のかみへさぬしまもるすむ山のまもりとなりぬ神ならまし

題しらす

中臣祐蔭

かすか山みねのこすゑのまつ幾千代かはしけの月をみるらむ

前備前守實聡

榊葉にしてゆふかけてつかへきりみかさの山のけふ初雪

後京極摂政前太政大臣

あまりにもかゝるめくみのみかさ山くもゐにかゝるやちよとそ祈る

若宮の神をにありてのちよまて

中臣祐春

代々をへて神につかふるみちまてとるかはせまてとまてそへ

題しらす

狛秀房

二葉より神をそたのむみかさ山我もおひにしのまつ末

まつふとなりてひさしく継聖にはま

権大僧都公順

うそちなはつきけつらよみ待きつ

たひ人の袖をかさねていくかへりなれし世をしら浪

題しらす　　前大僧正禅助

いまも猶あはれはかけよみくまのや昔の跡に神もとゝまれ

法皇御製

いかり山ふもとのちりもはらはなんかきりなき世にいつかうかはん

二品法親王家五十首歌に松雪

前中納言経継

冬されはみやまの松もかきくもりこほる心も雪ふるらし

弘安百首歌奉りける時

入道前太政大臣

雪ふれはみやまの松もゆふかけて冬そ神のしるしみえける

光明峯寺入道前摂政内大臣に侍ける時

家に百首歌よみ侍りけり

従二位家隆

ちはやふる神のみむろのますかゝみかけていくよのかけそうつらん

題しらす

法性寺入道前関白太政大臣

神かきやかんなひ山の時雨とそさゝつの糸とゝきるや

みかさの日をもとつまて待ける人入ぬらむ

小

祐子内親王家紀伊

ゆふかけてこゝろにかけし世をいとひしかりのふるれ

宮居をつくりて前大納言資季卿よみ侍
りけるによめる　従三位氏久
君のためやすき世をおもふ心より神山の松栄えぬ
らし　前大納言資季
いく千世かさかえてかぎりなからん神山の松の栄
神祇　権僧正桓守
くりかへし君か御世まもる神をあふく道をそしれ
前大僧正仁澄
君まもる神をいのりてくもりなき御世をてらさん
日吉社によみてたてまつりける百首歌よ

前大僧正慈鎮
さりともと照らす日吉をたのむかなくもりなき世に
神のめぐみのふかきちかひてしかな
法眼兼誉
わきてなほめぐみにもれぬ御法の世をまもるひかりのてらす
釈迦のちかひ社まもりてもみ給ける
天台座主慈勝
百首歌奉りし時
三輪の山ひとつにかかる月の影ありけるも神の
前大納言為世

みちゆりて七十の社のめくみそへつゝ七千代まてにつかまつりなれ
老しらす　祝部行氏

いまゝて神のみことをひきかきてことゝはゝやまるかたさの松
法眼慶宗

君か代のたのみをかけて神かきはいのりのまゝにひく松の白ゆふ
後遊楽関白前右大臣

たえぬ世とおもふにもまつ神の心にまかするかすかめ
百首歌たてまつりし時
前関白左大臣　押小路

あめつちの光をそあふけ神代よりたえぬひつきのかけをそさき

寄国祝といふことをよませ給ひける
法皇御製

くもりなき速日のみねにあまてらすかみのめくみのまことあらはれて我くに
百首歌めしけるついてに

我国は神の家とあふかれてつきせぬ清きなかれなるらん
嘉元百首歌たてまつりし時
前右大臣

くもりなき神の心をうつしてやみもすそ河やなかれそめけん
河月といふことを
伏見院御製

いすゞかはたえぬなかれのそこきよみ神代かはらすすめる月影

恵助法親王

すむ月のかけをそへていすゞかはふかきめくみをたのむ浪哉

太神宮に詣てゝよみ侍ける

法印家信

いすゞかはきよき昔の神代まて心にうかふすみの月かけ

題しらす

慶舎忠

まてしはし神代のまゝのみことのりつたへてかしこき人

荒木田氏忠

みち山けのうてさいはひとえにかりまつ思ひかれぬなかれ哉

伊勢國にしる所侍けるを人にはまうしつ

あらそひしらるゝ人中侍けるかいまそことゆ

かす侍るに民アて賀茂宣りに人中つかへり

けり

法眼源兼

いせの海やいまもあまてる神風にみちひくなみのよるそまつる

題しらす

大江貞重

神かけてしるしはかゝる世に石清水の神を我身とたのみてそすむ

石清水の臨時祭を

前大納言師重

九重のみかはのたゝしの櫻花神も昔の春はわすれし

紅葉のこゝろを

後二条院御製

世乃為あもおしと思ひたるに山背は秋の空をも思ひ
百千よ許めされしつゝやに

法皇御製

よそふからにこゝろ残まゝに鹿屋のこさよ紅葉のなかれ近く

嘉元二年仙洞院百首歌たてまつりし
時夜紅葉

前大納言為世

嵐めりかまよりつききらかやしもゝふくさ吹かれて紅葉の

文治五年女御入内屏風に内侍所紅葉

儀式ある所

前中納言定家

君かためそまことにいろふかきあけさにかゝるしてふ雲の上人

天仁元年鳥羽院の御時大嘗会の悠紀方紅葉和歌音高山をよめる

前中納言匡房

年号不審橘家集にあり
よつふなるとたる山の紅葉は色ふかくぬ天のはしたて

康治元年近衛院の御時大嘗会悠紀方紅葉和歌三上山をよめる

左京大夫顕輔

ちはやふる見えけるの山の紅葉をも紙にしみてそ花

延慶二年新院御時大嘗会悠紀方
神楽歌石戸山をよめる
前大納言俊光
冬の夜のあまのいはとの山のはにとこやさえまさる出る月かけ

続千載和歌集巻第十

釋教哥

菩提心論曰漸加至十五日円満云号
のこゝろをよませ給ける
法皇御製
思ひそへてみけいかゝそれと大空の月はひとつのまとかなりける

三摩地現前
月のあかゝをいまそん雲さりとはらひぬるけふやはれぬる

十住心論の開内庫授寳
さとりぬる十地の空にはれてそ見ぬひろのまことのみのりなり

真如親王かくつまく侍けるに

弘法大師

くはかり達磨をしれる君なれは陀多謁多まてはいたるなりけり

觀音院にてよみ侍ける

權僧正智弁

觀念の心もあはやまうせも常樂我淨とこそさとれ
志賀の浦浪の音もしけしとみく

大僧正明尊

ちゝの般若空我とは為ねは光そ行なんそとよみにて侍れ

如秋八月霧嶽細清淨光の心をよみ侍ける

前大僧正實泰

霧ふかくまよひし程そ妙のよの月をへたつるさはりとは也

妙觀察智のこゝろを

法印守禪

霧はれてくもりね西の山かせにはらふもともに行月の影

然此自證三菩提者過一切心地と

前大僧正承澄

見る月の雲のほかたく出ぬるは霧も霞もあらしとそへそね

大日經成就悉地不染垢妙清淨圓鏡常現前

寂然上人

うゑをくいまへとてそねんによみくかへこなかとかり

鳥羽院御時仏あて摂乃うつしを給て参

し侍けり　覚鑁上人

ます鏡うつしてそこゑうすゝてゝ海とに無九行とそみる

御返し　鳥羽院御製

かくるゝ難を行よおねとかくみの影にうつそ宿

真言院乃花をめらんして

法皇御製

こゝ乃世よつるふるむへさこよかれちるぬ桜の色を見る

御返し

前大僧正禅助

こゝ乃世よちるをちらぬも九重乃花の色をハ君そ見るへき

有宣不二乃こゝろを

法印道我

むかしとぞおもひとも見し今そこの海との法の宝道ハ

法花経席放照于東方を

入道親王尊圓

来ぬらこそてして法の色もうつる時を世にそ見るする

我見燈明佛本光瑞如斯

源有長朝臣

昔の春の光みつなはいまもみ法の花そ咲くらん

方便品 漸々積功徳

法眼親隆

ちり深の袖にもふくろりきりおほくなる花の色は

母の周忌に法花経をうつしかきてまつさく

のふせよりて表紙の絵にかゝせ侍りしに二の

まきの心を 前中納言定家

おしまずよかきつのかねも花のけこれもたゞのゝとておきと

譬喩品 逍遥院御製

わか心うつる車にのりつゝもひらかへとうしとおもひけり

信解品 譬如童子幼稚無識の心を

法印定為

ふてころもむかしひをさけぬおもまよひひとかなしかりし琴を

薬草喩品 備部源信

ひとつさへそらにあめふりひらく三草ふでまて木と枝さしてかり

待賢門院中納言人々しるしめ侍りて法花

経廿八品の歌よませ侍りけるに授記品於未

来世咸得成仏の心をよみ侍ける

皇太后宮大夫俊成

いかなれどかくさしてあはれこむ世みなとをこしまてしまさを

安楽行品 深入禅定見十方仏

よろつよはかりをしめて今はまたハ一つこゝろの光をそみつ

涌出品従地而涌出

池水のそこよりいつる蓮葉ハいそてみとりにしるしをそみん

寿量品作是教已復至他国

前右兵衛督惟方

身ふかき秋のやまのはにとまるのこそちりぬけけ

方便現涅槃而実不滅度

権大僧都澄円

よりそてけをとくせぬ山たかの月ハいつまてもまし

勧発品のこゝろを

法印成運

みな人のあとやかる山桜ちるひとけの花の下かを

諸行無常是生滅法といふことを

前大納言為家

つゐにゆく世をふかくそハきえぬるやけふをとしてまたき

仁王経観空品をよみ侍ける時郭公鳴て

前大僧正忠源

きゝぬるもむなしき空の時鳥いまひとこゑのなくはいかに

色即是空のこゝろを

瞻西上人

くまもなき月をもてなむむかふにもそらのかきくもりさきつまけり

不妄語戒をよめる

権大僧都慶範

草のはの露も光のあまたとて玉とはいひていつはりそなん

草繋比丘を

権少僧都[illegible]

草のはにいはふる人のむすひてしとても露の身をおもふなれ

唯識論智与真如平等々の心を

前大僧正良信

雲きえてかけも光もみえけれはひとつにすめる秋の夜の月

心清浄故有情清浄

覚懐法師

かりねさめぬるよはせてそうけひのうきよのゆめをしらせとも

未得真覚恒処夢中

法印実寿

これやこのゆめのやうなるふるさとにまどろむまてもみるそさめぬる

同疏に覚知一心生死永寄といふことを

法印[illegible]俊

かねてしもひとつにさとりあまたなる世々にめくりしことを覚えて

法性寺入道前関白舎利講のつゐてに人々に十如是の心をよませけるに 如是力

前中納言定家

見しはかりて夢にかへちく人をたのますのかゝちあら衣

五百弟子品　九条太政大臣女

かさねつゝ心のうちそわか袖によるを玉とあらそことなき

法印聖覚

夢のうち玉のゆくゑもあらはれぬ身をうつすなかにすゝき袂よ

勧持品　西行法師

いかにしてこの世も袖にやとりきんそてゝの世も在明の月

寿量品　道因法師

いまよりはいかにすいまのもとてしらぬなかまの月

権律師澄世

まよひの世をてらしてこそはさやけきなかなかの月は雲かくれけれ

妙音品　前中納言定資

身をかへてあまねくみちひく深きそ人をとりしさむちかひなれ

後法性寺入道関白右大臣に侍りける時家に百首よみ侍りけるに教茂のこゝろを

刑部卿頼輔

あひかたき法のうきゝをえてこそ身はくるしき海にゆられさまよへ

普門品種々諸悪趣　源兼氏朝臣

つたふまてつくるみちにはまよふ心も契ありけることのはのみち

言語道斷心行不滅といふ心を

前大僧正忠源

今はまたことの葉さへそみちたえて心のおくを尋ねてそあかめて

性助法親王よりつかはしての比法眼行済法花

経をかきて供養せられけり

前大僧正禅助

さらにまた光も照らめみ法の花のさかりにあへるひかけ

前大納言為家身まかりてのち一めくりに

おなし為氏卿法経かきて供養しけるにさそけ

物とくり縁とて　従三位氏久

昔みし筆のあとにて法の露もさらに涙やそへてかきよすらん

一品経を書写山にたてまつるとてよみて侍ける

其中に　皇太后宮大夫俊成

毎日に[illegible]まことのみちの月をみてけやあるらん胸の雲と

思順上人扇とりてたてまつりけるそれ

けるのちにたまはせける

後深草院御製

なき人もかけをうつしてかへる月をこよひも月とみるかな

无量寿経易往而無人乃心を

西行法師
西へゆく月をやよそにおもふらん心にいらぬ人のためには
猶如浄水洗除塵労
前大納言為氏
なをつよ心にかゝるちりもなしこゝにきよむる山川の水
観無量寿経王宮会の心を
円浄上人
春やとはまよふくらきにさそはれてかのむかしまてきゝしを
日想観応当専心繋念一処
照空上人
ゆふ日さす入日のあたり一すちにむかふ心はみたれさりけり
後鳥羽院下野とゝめ侍ける十六想観の
心をよみ想観を　前大納言為家
庭さえてすゝしのかけにむかふ身にとゝめてそみる
光明遍照十方世界といふ心を
源空上人
月影のいたらぬさとはなけれともなかむる人の心にそすむ
下品下生の心をよみ侍ける
蓮生法師
みちすからまよひてあるなかにも月はみえてあきらけみけり

佛開示始知方便之意を

順空上人

雲とみる花ももみちの山櫻色はよいまそむらさきにおち

阿弥陀経常作天楽の心を

後柏院

妙なるのねはよそと思へゆくへにたなひく雲に世や吹らん

往生論永離身心悩

くるしみもいとし捨といひし身をはなれてこそ心やすけれ

法印聖覚説法しけるにつかはすとて

この菓と法のつきぬ精の念珠をとゝめて

つかはしける

前権僧正成賢

極楽のみちのしるへにかくる露を我月玉とおもひけるかな

返し

法印聖覚

さとりゆく心の玉の光りそふ月のやとるてらせとそおもふ

真言の教相の事をたつねて後礼にそえてし

まつりて心いとふかくしるして遣ける人の

返事に

前大僧正道覚

おもひきやおもひかけぬ法の水のなかれにかはる心をもとしこさ

前大僧正公澄

石河のまちひとなりけりとよ

みつからとも法のつひにまさりこそ

権僧正桓守

むかしにも立かへりてそすめる岩川の流れはこゝろをもいく代経
代々の絶ぬをかはらぬとそ思ひてよみ侍りける

権大僧都澄俊

藤林の法のむしろにたえし家の花ふさそさかふ

因宗ある法花会にむかしなにかしあつかりに
まいりて雲のいくふり侍けるとて

権律師定海

思ひきや庭の白雲ふみ分て今はみちある世にあはんとは

前大僧正禅助

思ひすはこれ代々の法のみちなかりせはみてまつるをしといふ
百年のめ傳しつゝくる

法皇御せい

聞しらぬちよをかけてそ法そつたへてやことにあらはれ
嘉元百年忌てまつりし時山

前大僧正道玄

わか山はちよをかさねし法のひかりくもらすすめるこの名也けり
久安百年あてまつりける時

待賢門院堀川

なにはなるみのまつりのさかりの雲はれて月のみかけをみるはうれし

釈教哥に　法務公紹

ゆめうつゝやみのうつゝをわけさてとも心の月をたのむかりそ

人の法文あつめて侍ける奥に

法印成運

なかりはいま空の月そともしつらやそてさとりけれ

題しらす

従三位宣子

かり法のゝ風にはらすともやとれる月の光哉

皇后宮

てらしける光もまよふのけふにてはれし月の影こそなかり

宰相典侍

ゆふくれのさやかなるしめしを月をなかめぬる月はなをまさりけり

談天門院

なをつゝ法のみちゆかゆ世中にまよひうゆゆるよりもすとみ

前大僧正親源

めくりあふ契りもうれしくおれともけり法のくちはの跡さへ残す

日吉社よみてたてまつりける百首哥に

前大僧正慈勝

とひたまふこゝろをみちひくはすなにおほりのとともにやとらん人のこゝろ

百首哥めされしついてに

法皇御製

久かたの空の月日のめくりこそ猶ひとを照すめくみなれ

喜日祓ふかくよみ侍ける

前大僧正範憲

やはらくる光とみえし春の日のめくりそねりくのさとりはそつ

題しらす

前大僧正良信

おこなひみ法よわつらひとかう経典のやまにまよはん

永福門院

ちかひあるはなひそあけかたそらの参さとのかひそなさん

弘安百首哥よみてたてまつりける時

入道前太政大臣

君かみちそいまもかはらぬ法はふきとはそ知らさ

天教乃心を

慈覚法親王

法をひとかあかみよりさそめてまよの花風そ見らん

前大僧正禅助

法とる人さみちとものちあれはよそに隠てへいて法まよはん

法印俊誉

うけえれ月をたよりてそ法をひらしりこはさとりの花知ける

嘉元百首哥よてまつりし時釈教

民部卿実教

世を照すひかりは人をよそに月こもと我身まよふしさすらの灯

題しらす　前大僧正慈源

くもりなく法の灯残る世なれともやみちはれぬ人そかなしけれ

前大僧正花恩

いにしへの光をさまにともされはきえなんとする法の灯

僧正覚円

きえぬへき法の灯みるなからひよかゝる人のなさけそあさき

弘安元年百首の哥たてまつりける時

入道二品親王性助

きえぬへき法の灯かゝけてもたのむ山のおくそさひしき

正和二年法皇高野山に御幸侍りしとき
代々のあとにたえて山のかくれ興をとめされ
さりしるはおりひつけ侍ける

僧正道順

あをみの山御幸されし跡はおほかれと法のみちはとそみえける

いかなりける折にか申つかはしける

覚鑁上人母

そこきよき心の水のみなもとはなかるゝ末もあさくそゆけ

返し　覚鑁上人

のちの世のよはしきは母なれは西のなかれをさきそほらん

むかしの山とそ浄土の門はいり侍けるとか

月をみて　　漸空上人

とりふさそ山に出しかおかしくは西まてゆくへ旅のよの月

題しらす　　歡空上人

ゆめのまにまつゆる月をさそひつゝ遥西に心をかけぬ日そなき

来迎のよそほひをおもひてよみける　　如空上人

ねてさむる人のこゝろをおもふにもうらやましき西の山のは

題不知　　権律師永観

世をいとひてあさこそ仏とたのむにそよりおもふそ嬉かりけり

千観法師

極楽のねかひはかなくおもへともまつ人をなほ頼しとそ思ふ

百首歌たてまつりし時　　入道前太政大臣

紫の雲をもしはし待ちみやいかなる影にか身をはまかせむ

堀河左大臣雲居寺にまうてゝ哥よみ侍けるに　　菩提左衛門

紫の雲ゐをねかふ身にあまたてむかへを契そおける

高聖人廣宣のもとより蓮花の花さきあへる

とよみ侍て　　二品法親王覚法

蓮のうへにのりまつ人をもかくれゐる心にかけてたのむなる

覚性法親王観音を紫雲にのせてま
つりてそのよしを云ふよし申はしめつかはして
侍るによみける　基俊

紫乃雲れたなひく山さとにこの月やてらそなるらん

返し　入道二品親王覚性

てらさんの月は紫のくもりなくそ西へゆきける

題しらす　前大僧正道玄

昔より三国をへてつたはれる法そこの世に
まよりつきなりける

続千載和歌集巻第十一

戀哥一

女につかはしける　兵部卿元良親王

あま雲のよそにみしこゝろよりとたえて君を思ひ渡る

久安百首哥に　皇太后宮大夫俊成

思ふよりやかて心そうつりぬる恋はことはりのかなしかりける

家乃百首哥合に初恋

後京極摂政前太政大臣

あらはしつる恋草やあけつらん此つかはく袖のはかなく

嘉元百首歌よみてたてまつりし時同心を

権中納言公雄

うきわ[illegible]は五月の田子の袖よりもほしかねぬる袂かな

初為縁恋といふことを

法皇御製

思ひそむる心の色を紫の草のゆかりにかけてつれなき

百首歌めしけるついてに

山鳥のをのへのみねのひとめをも面かけさへ涙への恋さ

恋の哥の中に

後光院入道前関白太政大臣

おちそむる涙は袖にかけられてはみなすみてぬ程やあらん

百首歌よみてたてまつりし時

前右大臣

おもひみし身をうらみていかならんちつきにふかくしほる袖

弘長内裏百首歌に寄火恋

前大納言為氏

なそとふかのめつさやなかくへおりたくしはのけふりよ

思ひしらす

藤原盛徳

君ゆゑふかくたてしは思ひしわすれていつのおもひのしたもえと

前参議實俊

うきにふるなみたそそてのしのやみ下たく螢とはいさなとも

藤原宗緒朝臣母

しつくさへ袖にあまるそ露けき何ゆへのまちかきかねけさ人めに

藤原重顕

しのひ音となくや霞くにへたてむかしりよりはつらん

嘉元百首歌奉りし時恋

昭慶門院一条

君ゆへ思ひしるへき涙ならはいかなる人の袖とみえまし

昭訓門院春日

たかゆへし心とせきかねてなくとそつつめ我袖よ思ひしるへき涙ならねと

春日社によみてまつりし三十首歌の中に

前大納言為世

しのひあまる心となにか流れまし涙はしらし袖にせくとも

弘安百首歌奉りける時

典侍親子朝臣

涙をはなにつつまむ我袖よかはるを人のとかれもみよ思ひしらす

式乾門院御匣

色にいてゝ敵のしるへの袖よりもうき涙なりけり

千五百番歌合に

前大納言為定

人しれぬ思ひはふかくそめしかと色にいてゝはいはしとそ思ふ

百首歌たてまつりし時

前右大臣

人しれぬ心にかゝる涙より身に出あまりしのふ成けれ

恋のうたの中に

中宮宣旨

おちまさる涙と人にしられしはおさふる袖の色かはるとも

贈従三位為子

枕にもしらせてふしのねをなくも人めはかりをせきてつゝまん

賀茂師久

我ばかり思ふをはかなくつらきてもしらし人にしられしの

平親清四女

恋しともいはねはおつる涙をは袖よりほかにしる人そなき

平重村

しのはんは涙こそかゝめ袖にせく涙にしのは人にしられなん

権律師實性

涙こそをさふる袖にあまるとも我といはゝ人にもらさん

寄郭公恋といふ心をよめる

惟宗光吉

我袖の涙ハかゝらすむなそかよひにかしとそよる

寄蛍恋を

従二位為佐

人しれぬおもひハそれとみよ袖につゝまぬ蛍ことゝも

藤原為道朝臣

よとゝもにあかす蛍に身をなしていそとおもひかもと違

津守国夏

あかしてハ人まつほとねおもひよる蛍もかゝる身にみさをそやれ

藤原信氏

思ひしらず

志のひあまるとも山のはにおもひの小あかの（ね）そて袖をかくとも

法性寺入道前関白家哥合に

暮恋

よそなからしのひてすみかりのつましかりあかれぬこひのくさを

恋のくさの中に

待賢門院堀川

まてといひし夜のあけはいまもやとおもふこゝろをいそそりさん

源清兼朝臣

志のひかねたちのいそそのかし心より恋しきころとハ

弘安百首哥たてまつりける時

前僧正實俊

おく山のいはりとこよりけねをふるゝなくやわれにぞひそかれん

忠孝のこゝろを　　亀山院御製

志らせはやいかりの水のたらぬとも心の下にせくとは

兼道卿下

わしもひむきあひのあはとこそ雄よいそ世の山水

源兼氏朝臣

住吉の浪のうちよせ草ふれや人のこゝろそゆるかなりとも

殷富門院大輔

人こゝろそゆるはよし人やみたれぬよせさらぬ海松

寛治百首のうちにつかうまつりける時

常盤井入道太政大臣

いかにせんうき木の槙老ぬとて心の花はしらす人もある

髪しらす　　よみ人しらず

志らせはや波もいまかはる花ぞ槙の下にそて

みか月のかけのみさしそふ人の

うらにつゝみけり

清少納言

これをみよう人いつまでかさ草を下ふくとも忠ひとりる

忠孝をよまむせ給ひける

今上御製

かよふつきこゝろさへそえて夏草のしけきこゝろ人の紙教へ

宰相典侍

しき道に草葉の露よりもあまたならへきことの葉を
ともし

百首許よみてまゐりしとき

太政大臣

かはらしなあまねき神の恵ひしる人のためにはあまねき神の恵み

寄池恋を

法皇御製

池水のそこに玉のみえつれて思ひし心を誰にかすまん

題しらす

前大納言為家

うきなにふかきの下はなみちこえて人を恋わたる哉

今上御製

まちえぬ人の心をみるまてにいはそ月日のつもりぬる哉

正二位為實

かくとたにいはてそ雲井にあはれしにまそらたちむとはかなし

祈恋月の

月のはりみちはつきて世の中にはつるありけり

津守國基

さふくいはそれりまのとみえて思ふなる室のはれとそしも

忍恋といふことを

前中納言為房

しのひつゝ恋ひわたりきさは人よいはそれりまのしるへかな

百首よみてまゐりし時

津守国冬

おほやけのみちあるよのしるしとてむかしにかへる和哥の浦なみ

弘安百首歌たてまつりける時

入道二品親王性助

神よゝりつたはるいせのいすゝかはたえぬなかれをこゝろにそくむ

恥しらす

新陽明門院発来作

[illegible]

寄若葉恋といふことをよめる

高階宗成朝臣

こゝろこそむかしにかへれはかなくもなにをたのみてあふよなるらん

百首歌たてまつりし時

前関白太政大臣

秋風はみやまくれのむらすゝきまねくそてにも露そこほるゝ

恋の歌乃中より

前内大臣通

人しれぬ袖の涙やかはらのかはそてを思ふの山下水

よみ人しらす

いつとなくまちてもひさしくらはゝやいまいくたひの

貞治百首歌たてまつりける時寄湊恋

後深草院少将内侍

[illegible]

こひ侘ぬいはぬいろとも心のうちをくは袖の色にもなりけり

題しらす　中臣祐臣

しらせはや袖のみぬるゝよるの涙人にまさりて心なりとは

前僧正公朝

わかそても志ほれてむすふあまの袖なるらん人めはかりまて志ほる[illegible]

源兼氏朝臣

人めのみおもふのうちにつゝめとも下にかくれてもえもくやれ

藤原為親朝臣

いかにせん袖にあまれる涙川せきもとめぬよとむならひも

式部卿親王家にて寄河恋といふことを

よめる　平時敦

人しれぬおもひの涙は袖よりもかはの[illegible]

弘長三年九月廿日内裏にて三首哥

講せられける時寄恋心を

権中納言公雄

世にもらむなかにそつゝむ涙川なかるゝ涙の川は袖にせきとめ

題しらす　藤原頼泰朝臣

あはれにも涙の川のさやくともうきをなかしてのちの[illegible]

百首哥よみてたてまつりし時

少将内侍

いかにして杉さへそよくなかれ川せゝの埋木かくれなきまに

惜人名恋といふことを

式部卿久明親王

なかれては人のためさへをしまれてなかれ川のや瀬にきつくとも

忍しらす　平政村朝臣

しほやくなひく烟もあまのそての下もえにゆくかたそなき

宝治百首歌奉りける時寄烟恋

祝部成茂

下もえのおもひをむねにこめすらし烟はたちもやらすなりにき

建長三年九月十三夜十首歌合に同心

と

前大納言為家

なにとなく我そかなしきふしのねのたえぬ烟は身をもこかして

恋歌中に

高階宗成朝臣

恋しなむ後もあはれのかたみとて烟はまさる人のおもひは

平維貞

しらせはやさらぬかたの烟にも色もちそふかりかふらぬと

藤原泰明

我こそこかれて思ひ知恋の烟はよそにみえねと

菅原経綱朝臣

つきもせぬ我下もえの烟こそ雲ゐのよそにたなひかれ

藤原為定朝臣

下りゐる雲の絶まも遠近にみえて山もや空にのこらん

前大納言為世よませ侍し春日社卅首哥中

祐胤法師妹

して過ぐるとたかひの夕立なふかゝりしと世ふさひを

うらうら雨ともふわまるやとさゝらえ侍けり

まよ

女御厳子女王

りかやきまりに吹きつゝわまもりしられそつむ袖や露え

名所百首哥奉りける時

僧正紀意

あら雨ふりすさみけるの夕立それともしらぬ空のけしき

題しらず

躬恒

人めもとしのはまし朝霧野にも山にもしかそなくなる

西室太政大臣

空にしりや人ハしるらんよそくのふもとの松に雲のゐるかな

天徳四年内裏哥合に恋

中務

むかしのよの夢にはきゝしくハわすらふとも今よみをや

題しらず

よみ人しらず

下ふのゝ子心をそのまゝにとのみなりていふく志せん

今出河院近衛

こひかくらわれそわかはまことゝも家の身をもおもはまし

後二条院位にましましける時人々に
めされし三十首歌の中にふかきをよむ
恋といふことを

贈従三位為子

かくねまに恋しなはやとおもふそ命はまさるかなしかりけれ
恋しらす

能誉法師

恋しなむ後はかくそと人もかなしみ世にはそれとも思はさらなむ

法印円伊

しらせそれつらさをせめてなけくやはいかにそれをも恨やとはむ

左京大夫實任

いかにせんしのふる恋のしるしをもしらせてのちはあはれさやせん

よみ人しらす

露ともに思ひしよりは小さく人我袖の涙の玉はさらにたへ

百首歌奉りしとき

従二位宣子

云首之内

かゝれとも心にはせく思ひをも袖にしらする我涙かな

嘉元々年内裏歌合に未言出恋

前関白太政大臣

いかにして色をつゝむに世にもれはしかなけきらんとひとの心さらしに

恋乃歌乃中に

平政長

しのひそめしおもひは人にしられけり世をうらみしにはてぬ埋木

正三位為實

くちぬとも誰かはしらん人よとこのふかきおもひねや苔の埋木

弘安百首歌よませてまつりける時

入道前太政大臣

我のみこそたかまの山の峰の雲のよそにのみしてたちかへるらん

寶治百首歌よませてまつりける時寄雲恋

花山院内大臣

恋しさそふけゆく空にゆめつゝ雲井のよそにさえやかへらん

藤原頼花女

題しらす

うき身にはなひくねよりもつらきかな夜半のつらさをたれにたのまん

弘安百首歌よませてまつりける時

入道前太政大臣

恋しさそかたへのそらへわきかへるあつゆふへのやむ時もなし

恋乃歌乃中に

前関白家押小路二条

思ふ人を独もへの心ねは数ならぬ身のかさなるかより

百首歌よませてまつりし時

従二位宣子

誰とかはちきりおかせんさき絶て我身よりわすれ給ふなゝ
思しらす

藤原雅朝臣

せきかねる涙の滝つせやまそは涙のかはとなるらん

漢天門院

かはしまとせくかひもしらす涙かはよわきまゝの袖よりそしつく
百首哥たてまつりし時

入道前太政大臣

かくとても涙のかはゝいつくせんうきなかれは袖にしからむなみ
形見そと

今上御製

思へとはおもひ出すをもなくさむはさはふせよとてしほるれ
なそ

三條入道内大臣

いつはりにあまつ名をしほのあまならみるめなきその袖はしほ
百首哥たてまつりしとき

入道前太政大臣

見るあふなかれはそのかなしとも袖そうちはらふ里にてはなかれ
也

法印頼舜

思ひかいのりしもさけとてとゝすみの袖よりかくれてあさましく
思しらす

権律師円世

かはしまとちるひかりのもたえむをあさまとちるまゝにあかつきとこそうき

海邊風弱

いかにせんうしとそおもふ波すらもおもふかりけれ色しみえすは

藤原清澄

世こゝろよはくの秋よりけとも波の雁と月そやとらん

権大納言冬基

なミとさりに思ふ人やうらむらん世さへそてとおなつ波と

寄山恋のこゝろをよみ侍ける

山階入道左大臣

とふゝしにあひ見てを後は山しけき人めにかりの恋路なれ

契後隔恋

従二位為理

恋そ猶ゆくゑしらせまし人志れなともいつはりそ契りのはて

家百首歌合に恋

富家入道前関白太政大臣

我恋のこゝろのうちはあらはれてあまのおもひなれおなしこと

うきこともかなし

續千載和歌集巻第十二

戀哥二

題しらす　　柿本人麿

かく山の木葉くれにゆく月のほのとほしよりて戀に戀せ

よみ人不知

ゆふされは山のはに出つるさなからも心を君にそめてき

無品元良親王家哥合に　　源宗于朝臣

人しれぬ心はかれにしわれなれはいつくにむかひなみなかるらん

戀のうたの中に

源信明朝臣

ひとりあかつきはなかくおもほえと三川ゐにみゆる物かな

崇徳院御製

わすれてふなけの情もみえなはそてにかなしき袖のうらみに

七夕によせて戀の心をよみ侍ける　　藤原範永朝臣

渡るらん七夕よりもまれ川なかよひや今宵袖のうへは

人しれぬ五千そてそめしけりつゝのくに

後鳥羽院御製

しら雨のふみしらぬ人もたなかりの世はおもひそこそすれ

題しらす

我恋はいそ波とこそいはさりけりあかめにはよふ浪のまとも

弘長内裏百首歌よみてたてまつりける時寄水
恋　　前大納言為氏

あさくはいかてみせし契そとそはさかれ山の井のあか

不逢恋を　　今上御製

涙川下にかよふ心あらはなかれて末のはや世たのまん

嘉元百首歌たてまつりける時同心を

入道前太政大臣

月にあまる思ひはかりやとしつゝ我涙にもなくさみもせし

題しらす　　よみ人しらす　（一本 在原行平）

忍ふ人しらぬおもひは涙よりそ路くらんの名をみをまし

邦省親王

まつの葉のかはらぬ色を恨ても猶しのふるは涙なりけり

中務卿宗尊親王

いかゝ秋の萩葉の紙に涙かいろのみかくしそめけむ

権少僧都澄守

とへかしなれくそのいへとしてそ露ものこさぬ秋をと

弘安百首歌よみてたてまつりける時

二品法親王覚助

あくやそのよのうき雲に物思ふ身の秋の河なと
詠じらす　永福門院
やまそら我思ひさためなきさ雲ならてあまたの御詠ありし
弘安百首歌人々よみてまつりけるとき
入道前太政大臣
空はたゞ雲まにかゝる三日月のよそへてまほしき恋の心は
百首歌よみてまつりし時
民部卿實教
ふむ月の空の雲かれやよそなからなほいとふかき身は
寄禁中恋といふことを
権中納言為藤
よろつ代は我のみこそ見るへきに人と雲のよそに我ゆく
弘安百首歌めされけるついてに
亀山院御製
かめの尾の松の末は我御代にてあらなむ身をも見ね
千五百番歌合に
宣秋門院丹後
河わなるうゑ木のねにてかなたなみのあひよる月影れ
詠じらす　大納言經任
いふせんかはなひぬさへやうてえまほしき人々の心なき世

あまくたりし神のしるしもたえすしてふくしまうけのみちそこれ
東宮傅師信

法印長舜すゝめ侍ける八幡宮六百首歌に
恋
権大僧都公順

あまてらすあまのいはとをさしこもりいてし秋月たかく御影の神と
題の歌中に
皇后宮権大夫

伊勢の海のあまのりもしらぬ人をこそおもひかへりてまもるらめ
為道朝臣女

立帰てもえん神の末とはしるの海はかりそめにのりなき
藤原季宗

いくせんかへてその御かけにうつる名のみ人をとこそあかしてあさ
平通時

あふくよりかひあるいはしみつのなかにかけて(?)われや
藤原資明

我袖にうつしのはかりはかにとくひもとく月しろ(?)の神
正三位知家

またしらずまてのあしまにたかけてはみのむすびやらすと
藤原忠定

松嶋やかしまあまのしほたれてたのむ心にかけしこ神代

弘安百首歌たてまつりしとき

大蔵卿隆博

ちいさよみねのあらしによる波をとほくも袖よりきくへかりけり

恋歌の中に　　前参議雅有

あま衣あまたそふ袖のうらそをみるあなかしこかはれて

題しらす　　為道朝臣

三せやかなしあかして鶴の声ならすこそ袖のうへの露そ

藤原師光

よそにみねのあらしのあまりやよそにうつ袖のしほれん

法印公恵

なにはえのあしのまよひにたえぬ枕のみなあはれ

祝部成久

秋恋はさてなれやあまりうれしやかなしあはなれて袖のなみだ

百首歌たてまつりし時　　関白内大臣

なかきよのやみぢのゆくへも浦波のみるあはに袖ぬれつゝ

題しらす　　従三位親子

しらねとも袖のしほれて人をかなしあはれをみよ

二品法親王覚助

なかさえはよもぬるゝ袂のかはりなれさそやらん

永福門院小兵衛督

糺すのやちかひはされはいのりこしけさはかもとあふひ

道親法師

なにはえやあしまかくれのみをつくしかすよりよさくねをのこすらむ

弘安百首哥よみてたてまつりける時

権中納言公雄

難波えやあしまにかよふ舟もみえすなりてやかはさるらん

百首哥めされしついてに

法皇御製

わかきみのまもりのかみもいつくしみにみをせしあひそめ契おきけり

二品法親王覚助

なかつかはふかくちかひしこの葉には露の命をかけてそ見まて

太政大臣

おもひてし雄[illegible]むかしの命をそていけるへのあとをいとはん

平宣時朝臣

いふことをたのむとりとかくし命をもかくかなたのみぬれ

民部卿実教

あひそめし後をもつらきみのすへあらのまにはやしるしなき

権中納言実泰

なからへの命のうちをそこさへ[illegible]御のりとおもひてや契やはせん

百首歌めしてまつりし時

昭訓門院春日

ありて世になからへはこそ恋のつらき人の契れ末をたのまめ

宝治百首歌奉りし時寄橋恋

従三位為継

長らへて恋ふる命をかけられは行くへもまてそうきたのみ渡らん覚しらす

祝部忠長

いつはりと思ひなからそその月日をも我身はまたたのむ久しさ

源俊定朝臣

行のちも人のつらさは残月をとふよ命のかきりなるらむ

文永二年九月十三夜亀山殿五首歌合に

不逢恋　普光園入道前関白左大臣

行かへりしらぬかれなからへて逢ふにかへてとまるへき身を歎くらん

前大納言為氏

恋しなん命にかへて契りしは思ひ世をそらしれ

平宗宣朝臣よませ侍りし住吉社六首歌に祈恋の心を

法印定為

あふまての命と恋の頼にてなからへられは末もたのまん覚しらす

法印長舜

ちきりしはふしのひて世のなかはいまてはけにあるとこそしれ

善空新少納言

いつはりに染ともしけて世の中の月あはれ年そへにけり

藤原為躬

春の月のつれもなかなか物思ふ人のこゝろつくすな

贈従三位為子

頼まるゝ人の心のうさそのを我いつそしひられん

前権僧正雲雅

恋しさにたへてのおもひつきなき人を恨てそまし

大中臣為實

おもふことかくれの袖そ色をかへしと露そこほれて

藤原秀長

しひしらんもあてゝつまれはうきや人のなけいかるらん

権少僧都教津道

あえぬへき命なりとも行末と契るはあるもなかりや覚ん

法眼寧弥

後の世と契るもとふはそれはあふまての命なりとも

中務卿宗尊親王家哥合に

道洪法師

あひみんとおもふためなれは玉のをのたえぬへきまて人をこふらん

恋のうたの中に

法眼兼誉

おしまそとおもふ命のいつはりて恋しなむ身そうたかれ

津守宣平

恋しなむ命のなそていつはりせん後さへ人の哀しらすは

藤原冬澄朝臣

恋しなは我ゆへとたにおもひしれつれなき心なりとも

後光明峯寺摂政家五十首歌合に久恋

源親長朝臣

つれなさをなけかむための命とはかねてよりおもひしりきや

恋歌の中に

権大納言實衡

命こそつれなかりけれおもひみせは今へてあるへきこゝちやは

春日社によみてたてまつりし三十首歌に

前大納言為世

命をは後よまつとてつれなさのつらさの限いきてこそみめ

嘉元百首歌たてまつりし時不逢恋

いつまてかなをつれなくておもふとも命にかふるものと人の心は

百首歌たてまつりしとき

六条内大臣

心よりみにもかへせぬ命をはおしむよしなきむとして猶人

題しらす　後二条院御製

道しあらむ御代のしるしはわすれてもふるきにかへることのはそなき

従二位家隆

かのつゝきなき世にもかはらぬは道をしる人の命なりけり

弘長百首哥たてまつりける時寄道述懐

衣笠内大臣

いそちまて道ある世にもふる身とて人にそみせよさそとこそ見れ

述懐哥中に　春宮大夫公賢

おひ人のしるしても道をつたへさりせは何を契なるらん

平宣時朝臣

後の世にむかしといはん世はまさそりやその人のおもひよるらと

百首哥たてまつりし時

藤原為道朝臣

世ゝをへてつたへいつくさむかしの我心より道なきあらん

題しらす　中宮

ゆくすゑの道のふみ分をとふまてつたへき契はこの世をそへ

嘉元百首哥たてまつりし時寄道述懐

贈従三位為子

なにはえのもしほ世まてはめくりさて契りけれ身と道をたのまん

百首哥たてまつりしとき

津守國冬

とふ人はたえてもひさし遠さとや契おかぬに待もせん

権中納言為藤

数ならぬ身をとふことそゆふたすき遠き契のたえぬつきを

寄国祝といふことを

前大納言為氏

榊葉に神のゆふしてかけてこそ遠き御代まてさかえゆかん

題しらす

永福門院周防

よろつ代のためしみ神代にいはふ神代のことのはの末はるかなれ

二品法親王家五十首歌に

前大納言為世

遠からぬ神代をかけて祈るともあはすは何や神もうらみん

祈不逢恋といふことを

皇后宮

神ならぬやよろつ代のためしとて祈る契もかひやなからん

祈経年恋といふことをよみ侍りける

法皇御製

こころからうきをしらぬもなほいのる神の御前

恋の歌中に

正三位為實

なかれてもいのる心にたのみつゝ袖のみぬらす身を神とて

あえかにいまはつくしひとつの花を思しおもはきみなみのとまりけり

中臣祐世

いつまで浪はふちともかはりあすをもしらぬなかの川のみ

平時見

こぬ人をむかしのまゝにたのまずはそれも恋しき人のまつこそまなみ

津守国助女

寶治百首歌奉りける時寄獣恋

前大納言為氏

あふことはかくてもいまはかれにける駒のつまなき中の恋のまちなき

憂しらず

静覚法親王

とふ螢よる影みえてしのゝやまゝたのひは誰かまほらと

曽祢好忠

飛鳥のふく夜ことにおくられてゆきかへりしも夜撫子そ立へ

中務卿宗尊親王

ちりやまゆりの花をみねにさむる鳥あそこなかぬ身をも逢

袮そそのおもとよこ山鳥のなかすくゞりそかひもなき撫子そ

弘安百首歌奉りけるとき

入道前太政大臣

あふことはこの山鳥のおろかにも世にふるならてねたのこそあく

建保五年四月庚申に久恋といふことを

よみ侍ける　後久我太政大臣

くもりなき世をやはらくるさん山高みかけてそちかひそたのもし

恵みのかそとよみの世給ひけり　亀山院御製

みやまおそれてそこにひちとおもふものはあはれとそおもふやま

盛明親王

あまくたりあとをたれにし山とこそみそなはれけれ

源兼康朝臣

数やうらむ心は世をさりゆきぬ人もしるへき

前大僧正道玄

いそのかみふるきためしをたつねてそ思ひつらん

院御製

この中におもはれ契をたてゝまもる神をも頼みそ

家に五十首哥よみ侍し時不逢恋

二品法親王覚助

いかにせんさてもたえぬる涙川あふせをしらてしつみそやせん

題しらす　万秋門院少将

流れみぬ涙の川のせをとめて身はあとなくいかてたえなん

中臣祐春

物思ふ涙の川のみなかみを流れてしらぬ袖よりやらん

津守国平

秋ふかしや吉野のはまいりせぬ山のけしきやかると

大江広茂

いつまてかくれかはれん涙川おもせはよそにさて流れん

平行氏

あはせかねしのふと忍てもほかにあまる袖の涙かな

紀俊文

いつまてかあはて袖にもやとるらんさかふにやこふと月のかけかな

中臣祐親

あふと見る夢ははかなくあかつきのねよ猶そ袖の涙なりけり

従二位経平

恋しねの夢にもひたすらになけく心のかはりみゆらん

前大納言為氏

あふことは遠さかりてもゆくすゑをたのむ夢ならはこそ

前参議雅有

されはまたこひやをかへて逢ふ事を夢ちにおもひさへん

鴨祐治

待しとて恨もそれなり夜半の人そ夢にみえける

高階成兼

こひねの枕はかはらして面かけは夢とさりてもねそ恋しき

中原時實

ちるとてもなけやたのまむ見る人もをしまぬ花は

よみ人しらす

はかなくもおもひけるかなこのよにはかなき人をたのみけるかな

よみて人の心はかなく人のせさそふ事をそおもひける

正暦四年五月帯刀陣歌合に

あふことの絶えてしなくはなかなかに思ひはさらに

是則

秋の夜をはなちてたえす月は見ちとなきを風

さそふなり

寛治五年従二位親子家歌合なり

権大納言公實

よそにのみ風をきくまてなりにける契りをたのむ心を

和歌と

院御製

夜もすから月をなかめて秋のよはさき

嘉元百首歌たてまつりし時不審歌

前大納言有房

たのめぬ契りてしさいのちをしのちにつれなき

百首歌たてまつりしに

法印定為

今はとてはらひしよ下のなみたをもむなしきつゆの契りかな

恋のうたの中に

後深草院弁内侍

おもふその命を人に契りても過るか世にもえやは逢見ん

贈従三位為子

さためなき命をいふにかはりけん契し恋とたのむ身なれは

法印房観

なをさりにたのめしことを命にていけらんかひもやあらん

平宗宣朝臣

あふまての命をしらぬ世中に人の契りはゆくとならんを

中務卿恒明親王家桜歌

行末の契りもしらぬやなからへてまつへき程の命ならねは

後二条院位にましましける時人々にめされし三十首歌の中にしのひて契恋といふことを

贈従三位為子

命はいかにそれこそさらん行末を身にはまかせぬ契なりけり

前大納言師重

契りしをまたせし浦の月をつりの波のよるとみえけや

今上いまた東宮と申侍しとき五首歌合に契恋

従二位為理

偽をたのみてはなからへてのちもしられまてはたのむこそあれ

今上御製

なのつゝいひし契りのまゝならはみをつくすとも
命とともの那

續千載和歌集巻第十三

恋歌三

題しらす　　順徳院御製

偽のなき世なりともいかゝせん契りてとはぬ夕暮の空

亀山院御製

さりともと頼むのまつ夕くれも契しまゝにいふ人もなし

文永七年二十首歌めしてさつけし時約恋

前大納言為世

頼みける心と人の忘れけり偽をさへまつとさきたれん

恋乃哥の中に

太政大臣

ゆくすゑの〇ことはしらねとゆかりある世なりせは

百首ことにたてまつりし時

入道前太政大臣

人心みるふしの御代にたちすゆる世に〇こと

思ひしらなん

前大納言師重

ちとせまてもなくと絶とそらにみの君そ何とやなる

権少僧都能信

たのみそつゆとつきぬ〇そてにかけ給はさりけん

法印行深

絶とてはあかぬものとはにかはる露の命なりけり

平貞時朝臣

暮れしも秋のまゝ涙絶ぬといひそめしは心なくいはよ

平宣時朝臣

ゆふ暮のやみに秋風のうすれゆく袖を露に

権律師円世

わかためにあれとつゆとゝめぬやすらひのあさひ嵐

弘安百首ことにたてまつりける時

入道前太政大臣

色に出ていはぬはりそれはしのひまの風のたよりもなけ

前大納言為世
きみかへんたかいそしらゆふかれはまるまてきみにいひなん
前大納言為世身まかりて後忌日法三十首
哥中に
法印宗円
はのこゝやかはら猶よありそん法しくかまくらぬ人ともされ
思しらず
右大弁澄長
身のあてともこぬ人をまつ人は心ときよりありあかつき
右大納言経長女
猶と云ひもそていかてせんまつとたのまれぬ人をまつ哉
法眼源兼

秋恋の煙となれはもえせやこぬ人ゆへの空にたつ雲
嘉元百首哥たてまつりし時待恋
津守国冬
こぬ人をまつよさむしろひとりみてそ月はてかての秋の夜半
永仁二年八月十五夜十首哥講せられ
し時月前契恋といふ心を
為道朝臣
いつせん月のなかはのたのめとも契りしよひとひそまたるゝ
永仁元年八月十五夜亀山院より十首
哥めされける時秋恋

津守国助

須まとはあらんゆふへまてあられいくよの月のみるへき
影しらす

宰相典侍

しらせやたのむつらひのまつのとにふきゆく月かくして
と

大江政国女

いまこんと契りしかともふけにけりひともまてや山のはの
月

三善春衡朝臣

ねられぬは涙かぬる袖のうへにやとるもつらくぬるゝ月かな

前中納言資名

とまりけるいつのなかひのあはれをかことしもけさとおもひしる歌
らん

後二条院位にましましける時人々によめされし三十首哥の中にまつよふかく恋といふことを

贈従二位為子

なをのつらさおもひをいそかふかりけれはなからへてこそせまし

前大宰大弐俊兼

しらしなはまたねはしたてなかめまつのうへのみそかのこゝろせそ

藤原宗継

ゆくへとひとりかなめてあはれいかにもありなからねさめのこの月

平宣時朝臣

ゆふかすみうへしのかけそみをやすらふ月そすゝしき

前大僧正實超

あらしふくまつのひとこゑ月かけをよそにはらひて秋あれは
月のみそおもふ枕にやとりけることひとへにそなかめて

前大僧正仁澄

身のうきはねさめの月となかめてもられぬよにふけ行か

後二条院御製

茂てたにしはこそやまのあてふるかつきを

伏見院御製

君まちてやまのはしろく月かけをそらになくしもいつかしもよ

今上御製

嘉元百首哥たてまつりし時不逢恋

前大納言為世

うきてもなを待てひとりにはかはらしとまちしよにこそしられけれ

修理大夫澄康

君こそは誰とかきぬるよかなつまてつく世はよふけゆかは
風にふくるをまちて人のなさけせよかし

中納言家持

あふことをこひくしたのみは中くるも歎いつんさまし
よもしらせつし人とまちよきひく

右近大将道綱母

しらせやはなみたにぬれしよるの袖いかにせよとかみたれゆくらん

題しらす　中務

夏のよのつきよ(?)むかしをおもひてねさめしてやるおもひなるらん

百首歌たてまつりし時

入道前太政大臣

あまひとそつゆさむくにおけぬとも袖ちきりとこはいそしらせん

秋田もるかりほのいほのむすふてすむとてもとこは露けき

題しらす　紀淑氏範

おもひやれゆきてはやるみちしたにおく露をそきえん袖の上かは

寛治百首歌たてまつりける時　基忠

土御門院小宰相

おもひやれ涙にしほる袖にこそ月をとまれとなきそへのうらに
ゐの雨もとてよるまの袖しほりける

後二條院御製

限あれはいはぬそなきあるせきとめん涙よいかにしのふとも

昭訓門院權大納言

うちつけにしほりもはてすいかさまによそにも人のとはゝしるらん

藤原泰宗

うちとけてしらぬ人かる新枕のせけるよりもしほるらん

よみ人しらす

忘るなよむすふ一よの新枕夢はかりなるちきりなりとも

思逢恋といふことをよみ侍ける

為道朝臣

あふひさへ隔る人めをいとふまに我おもはても流るゝ涙は

嘉元百首奉りける時忍恋

入道前太政大臣

かくとたに絶ぬ心のみ思ひつゝ何ぞ此月の雲ゐにもせよ

初逢恋

前大納言為世

つれなさにたえし命をなからへてあふよにかはる心なりけり

弘長二年亀山殿十首歌に稀逢恋

光俊朝臣

このまゝにはれ君にさはらぬ夢ならはつらきにつけてや頼まん

恋歌中に

大江頼重

いかにせんうつゝも夢とたとられてあふよも今はなかるへき

法印良慧

あふとてもねぬよのひまの夢ならて見ゆるまてなき契ともかな

前大僧正實超

人はよもしらぬ物から我もしらし心かよはぬ夢の契りは

権大納言兼季

思ひつゝ寝る夜の床におもかけのうちよひそへ夢にかりね

源光忠朝臣

物思へてとふ母なとさりぬるさそわかるゝ袖は涙なれ

左京大夫實任

こよひこそひとひとはしらるゝ有明をいまより後といひし契らん

三善康衡朝臣

なかきむかそ我をしとも[illegible]やましのかねのさ別かは其

光俊朝臣

こゑよくにあらいふにとまりまつおもはる涙かな

題をさくりて詩哥をあはせられ侍し時

別恋を

源具行朝臣

あはれねのうきよとせめてあさしとやあふよをまつね別ぬらん

花しらず

従三位親子

なかくにむかしさよりもうらみのと涙てあすよ為忍く

民部卿實教

ゆきてあふ別をいそくゝきの心よりふとりのこる

前大納言家雅

うき人のみはいそくおもひをよそになりなん袖よかゝるらん

法印公恵

うらみとよあはれとあはつまれともゆきてとゆるつき別かは其

二品法親王家五十首哥に別恋

前僧正道性

こゝろひとついかにしのひし別なかなかなかれねをもとこん

百首歌たてまつりし時

少将内侍

あかぬとも心なるへき別ちをとゝめかねぬる涙よかこちかほなる

別恋を

今上御製

人はいさなからんあとの心かと後を契るもうき別れ

遊義門院

行末のふかつれ契もしはしやすらふ別のいまなくもかな

芸州権大守有忠

あやなくにさそへりやへのやまとらふかきまてみやこはさき別と

寂恵法師

ちりとも人はとゝめぬ別ちれ我のみつらき暁のそら

祝部成久

ミしとそなにいつはりてほとこれを旅の別ありせハ

菅原秀長

ゆくしとやこひそほミこむしといひくれぬおかなる世

藤原基祐

後とこひしのめもたえぬ別路のとれつゝさかなくはと逢

よみ人しらす

別路乃袖をいつゝ小野つともなくぬれぬるわかこゝろ哉
三善貞康
わきぬとも忘しはかなくやまてし遅ゆらん形見の別かな
菅原宗秀
行まてと暁よゐのうらみけむしかし我袖の有明の月
藤原宗行
月毎にと面かけとあるよこきぬぐの袖の別をもちて波よ
弘安百首奉りける時
大蔵卿隆博
別路の袖にかへしをいひてぞ世にまつ有明の月やみえけん

題しらず
前大納言通顕
うき人のとはぬもおもちにかへてひみやすらん有明の月
広義門院
有明乃月さへつらやいつまてわかれ道にさそひきぬらん
法皇御製
きぬぎぬの袖の波をかたみにて面影とむる有明の月
題をさぐりて詩哥をめされ給ひしとき
別恋のこゝろをよませ給ひける
忍ぶまにこれや限とうちなく袖乃かはりぬる有明の月
暁更恋といふことを
今上御製

恋しておもふことやかて別後の涙にくらへと思ひける

嘉元百首歌たてまつりし時暁別恋

前関白太政大臣

おきわかれ涙にやとる月かけは袖にあかつきのかけやみえまし

百首歌たてまつりしとき

右関白左大臣 押小路

しのゝめの峯にも雲はわかれけりわかさぬ人の袖のしつくは

正安四年六月五首歌合に忍別恋といふ
ことをよませ給ひける　後二条院御製

せきもりは暁かけてあらすらんよはの通路をあふさかなれは

百首歌たてまつりしとき

内大臣

心よりわかれてそいそくせきもりはわかるゝことをしふかきゝ

恋歌中に

前大納言為定

くらくしてわか袖よりけさはつれなくもわかれし人のこゝろあさなれ

貞治百首歌めしけるついてに寄原恋

後光厳院御製

このねぬるかりねのゆめの原露けさはおきわかれつる涙なりけり

女のもとよりかへりてつかはしける

左近大将朝光

なとしのこゝろにさそともなくゆきゝきかよふとしも秋の露けさ

百首歌たてまつりしとき

入道前太政大臣

ふしとみ山(ます)しも家の上にしら嵐のわさけれなきわたる人のなけ

題しらす

賀茂久世

ときそめる花色のおもひの露とちらにうつろふそきさ(られ)ぬ

女のもとにまかりてあしたにつかはしける

藤原定経

おきつらん袖の枝のいつのまにかけさらへやそ露きるらん

返し

よみ人しらす

ふしやまあさつゆにむせかれはさむしろにあさけきぬらむ

後朝のこゝろを

遊義門院

鳥の音におきてわかれし佗つこゝろの後の月そきえなかるらん

永福門院

わかれても猶こそふかき名残あれはひとり見る夜の床の秋風

百首歌たてまつりし時

二品法親王覚助

いまはそてわかのつゆぬれたちわかれ鳥の音をそへて東雲の空

後朝のこゝろを

大蔵卿隆博

三室やまおろさぬ紅葉ちりへけさの枕にあまる面けり
人よりのいひてわちよちりしきる

祭主輔親

世にふるをたえぬあらしにやむいそまちし昔こそ人
恋しらす

素性法師

いつのまにわちにけむは白浪乃紅葉はゆき時そなき
家に百首うたよみ侍ける時 恵慶

光明峯寺入道前摂政太政大臣

忘れぬはやまふかき夜半の月かけてもとの[illegible]
恵乃亦は中なり

前大納言俊光女

いかにせんうき中川のあさき瀬にむすふ契のはてもたのまぬ
花に百首うたよみてまつりける時

皇太后宮大夫俊成女

花のこる池のみきはのあさ氷そこもしらぬ
ちりぬ花よこそふ人あるとさへけふ人なき

和泉式部

あさ(?)ねふかみてらにわたる雁そくもゐに[illegible]
つらりけり

帰雁のこゝろを

源兼氏朝臣

よしやまたそれをたえぬとおもふかな世にあまたちる菊の

弘安七年九月九日二首奉講せられける

ときは寿菊慈といふことを

後近衛関白前右大臣

うつろふ人の心をしら菊のみはぬるとなふたのむらん

前大納言為世

きみかほとおもひふかきは白菊の霜まつかけの契りなるらん

題しらす

津守国道

我やみのこつりを月は草のはらすむところいつなりけん

法印長舜

わかやのこころふかきはれいたる人の心の花はあるまし

権中納言公雄

花つきのわかれくしかるたのまれつわかきの花のちきりいさ

弘安百首奉にあてまつりけるとき

前参議能清

なつかしい我ながらぬる月は人の契りとそえやはなりなん

人のうつりの心にきつねさ

藤原宗秀

西けとたひといふ事をわかすなみまことに人の心うつるは

題しらす

藤原利行

むかしはおもひありとも梓弓もとの心にかへすまふ
藤原宗泰
これはあらしをみすめなはおもはぬ心の程にもくらん
業平朝臣伊勢へまかりける時歌をよ
侍りける女房のもとより
よみ人しらす
ちはやふる神のいかきも越ぬへし大宮人のみまくほしさに
返し
業平朝臣
恋しくはきてもみよかしちはやふる神のいさむる道ならなくに
月てらしつまにかへりと女のいひおこせたり

返し
中納言兼輔
うき雲に身をしなさはかくて月てらすともおもはさりけり
猿恋歌よませ侍りける
土御門院御製
別てもいて在明の空の名残契りて出し帰るさの月
百首歌奉りし時
左大臣
月にもとよりさりのとおもはぬをなとみるたひに涙そふらん
正和三年九月廿日十首歌めされしついて
よ帰待恋
今上御製
ともよとおもひ出つるをたのまゝはわれともいはし夕暮の空

恋のこゝろをよませ給ける

後鳥羽院御製

ともねせぬよかれのつはさしもおきてひとりわつらふ袖をみせはや

百首哥よみ侍けるに

皇太后宮大夫俊成

なにはかたあしのしのやのしもさむみひとよねしもこほるなりけり

二条院へまいりて恋といふ心をよめる

中臣祐春

此ころはかはるまことをみさりしそあまたの人のつまときゝし

題しらす

藤原行朝

こぬ人の別かなしき鳥のねはこぬよの床にまさりてやなかん

法印円勇

わかれしにみせし涙のなこりまてさぬるよことの袖の月影

丹波忠守朝臣

みしまゝの袖に涙はかはれとやてまつのと待し月かけ哉

道義法師

面かけも涙にそひてうつりけり月さへ人の契りかさねて

藤原基有

わするゝ袖こそあれよその月人は涙のかゝるにかゝるとも

百首哥たてまつりしとき

権中納言為藤

西けそいやしかりまつます鏡みさりしよりそうつる波よ

芸家にて名を惜恋といふことを人々

よみ侍けるに

権中納言親房

いとゝなをあひそのちもとられはいふかなししの袖の涙そ

宝治元年十首歌合に遇不逢恋

前大納言為氏

おもひよをとふらはひなさし蓬にあとさへやまとみゆ
やと

わすれんを

前大納言為世

なきひとをはるそのちにはひなさはまさみぬ蓬か露そかり

恨恋を

藤原基任

別てはさまてやまさんかさとれ人のこゝろをみる夢もかれ

嘉元百首歌たてまつりし時逢不逢恋

従三位為信

人心いかなるひまにかよひくまさはさねよはの雲る

権中納言公雄

ひとよふしも人なくしあらしよみ蓬をゆめともといひそなき

前摂政左大臣

ゆきさとそのつまなさみまかはゆくかなしのは思ふらし

住吉社によみてたてまつりける百首哥

中に　　　　大納言忠良

見るとしもをしそ別し在明の空にかはりて秋の月かけ

なか月のあり明のころよみ侍りける
　　　　　和泉式部

よそにてもおなしこゝろに在明の月ハ見るやと
　　誰にとはまし